

---

# ハレルヤ

雨野知晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハレルヤ

### 【コード】

N0414F

### 【作者名】

雨野知晴

### 【あらすじ】

たった一つからのやさしくも悲しい嘘によって始まった物語

## プロローグ

「救急車だ。救急車を呼べ」

何度も見たこの悪夢

私と母の最後の記憶

「おかあさん、かすみちゃん、しっかりして死なないで」

私は真っ赤な血に染まった

母と霞にすがりついて叫んだ。

「ぼくのせいだ、そとにあそびに行きたいってわがママを言ったぼくのせいだ。」

私は幼いながらも

外に遊びに行きたいと我が儘を言った自分を呪った。

「ぼく、もうわがママをいわない。だから死なないで。ぼくを一人にしないで。」

父が死んでから女手一つで私を育ててくれた母をなくしたら

私は生きていけないことを幼いながらも私は悟っていた。

「ぼく、ふたりともがしんだら、ぼく、ぼく、生きていけないよ。」

幼馴染の霞はすでに息が無く、私は喘ぎながらも呼吸をする母に  
縋りついた。

そんな私を見て母は

「……誰も……悪くない……わよ。」

とこつ告げた。

さらに私に向って。

「・・・あなたは・・・あなたの・・・最後の日まで・・・生き・・・  
続けて・・・私の・・・愛しい・・・はるや・・・」

そして最後にやさしい微笑みを浮かべて

ゆっくりとこう告げた。

「だから・・・最後に・・・お母さんと・・・約束して・・・

誰も・・・悪くない・・・から・・・お願い・・・だから・・・  
誰も・・・憎まないで。」

そういつて母はこと切れた。

これが最後の母との会話だ。

「おかあさん、おかあさん・・・

うわーーーーーん。」

背後ではその姿を見て放心状態であったもう一人の幼馴染の鈴蘭  
が涙を流していた。

虚空を見つめながらまるで壊れた人形のように姉の名前を呟きながら……

手からはグローブが滑り落ちていた。

……

……

……

……

・

このあと私は3日間ほど寝ていたそうだ。

そして夢はここで終わらない、このあと私の見るのはきつと

「お姉ちゃんはどっ……」

ああ……

やっぱり私はこの夢をまた見るのか

「ねえ、なんでお姉ちゃんは死んだの」

そう私が殺した二人の事で私を責める幼い鈴蘭の姿……

どうして私はこんな夢を見るのだろうか……

「お姉ちゃんが死んだのはあなたのせいよ」

それは決まり切ったこと私は罪人だから

私は許されることはないから

「あなたのせいよ、あなたが失敗しなければ」

だから私が罪人である証を

何度でも見てしまふのだなろう

「お姉ちゃんを帰して」

当然だろうな

私の罪は消えない

「あなたが換わりに死ねばよかったのに」

私の人生の最後の日まで消えることはないだろう

誰かに許してもらいたいとは思わない

「わたしはあなたが心の奥底から憎み続ける」

しかし、もしも許されるなら・・・

彼女だけは許してほしい

「なんでこんな奴を引き取るの」

巻き込まれただけの悲しき人を

今も消えることのない憎しみを抱えていて

「わたしの目の前から消えてよ」

私のつたない嘘に気が付いていて

どこかで真実に気が付いていて

「わたしはあなたを永遠に許さない」

私を憎むことは罪ではないのに

罪の意識に苛まれている彼女を・・・

「絶対に許さない・・・」

どづか許してほしい・・・

## プロローグ（後書き）

作者の雨野知晴です。

初めての連載ですネ。

更新は亀の歩みのように

遅いかもしれませんがご了承ください。

## 第一話

ザー

「雨か・・・」

またあの夢を見た。

悲しみの始まりを・・・

目ざまし時計をみると時刻は5:00

予定より10分早いけど準備をしよう。

支度を終わらせて

階段を下りてリビングに出ると

小母さんが朝食の準備をしていた。

その横では小父さんがコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。

「おはようございます、桔梗小母さん

いつ朝早く済みません。」

この人は 檜原 桔梗 《ひのはらききょう》さん。

母子家庭であつた私の母親が亡くなつたとき

私を引き取つてくれた人だ。

「いいんですよ。」

晴也さん、私がやりたいただけなんですから。

それに、そんな顔をしないの。

でないと、あなたのお母さんに会わす顔がありません。」

「小母さん。」

この家では私の母親の話をする事は禁止なのである。

「なあ、晴也くん。」

もう、鈴蘭に真実を話したらどうかね。

私は君のご両親、大本ご夫妻には本当に申し訳ない気持ちでいっ  
ぱいなんだ。」

こう切り出してきたのは 檜原 柊 《ひのはらひいらぎ》さん

この二人には母親が亡くなつてからの

6年間ずっと面倒を見てもらつてきた。

「柘小父さんもうその話はいいじゃないですか。

中学の卒業とともに私はこの家を出ますから。」

「だが、しかし……」

「母が亡くなった後で

親戚親戚の家をタライ回しになってるところを

引き取ってくれた小父さんと小母さんには本当に感謝しているんです。

その上、6年間も役に立たない私を育ててくださった。

家族の関係が壊れてしまいかもしれないのに私を引き取ってくれました。

これ以上あなた方に迷惑をかけるわけにはいきません。

それではこの話はこれで終わりです。」

こつ話を切らせてもらった。

いまは5：20分

予定を少し遅れている。

「わかった。」

鈴蘭にはずっと黙っていることでいいんだな。」

「あなた……」

「はい、これが本当に最後です。」

もう、この話し合い話しないことにして下さい。

……私なんかが我が儘を言って本当にすみません。」

檜原夫妻は悲しそうな顔をしていて、

私は話をそらすために

「桔梗小母さん、すみませんが朝食をもらえませんか。

すぐに出かけるんで……

もう行かないと

帰り道に檜原さんと鉢合わせしたら大変なので。」

「晴也くん……」

「そんな顔をしないでください小父さん小母さん。」

あ、学校への連絡はおねがいしますね。

それではいただきます。」

そう笑顔でこたえつつも

檜原夫妻の温かさに涙が出そうになった。

私には温かすぎる言葉だった。

.....

.....

.....

.

その後、何かを言いたそうな檜原夫妻を押し切って家を出た。

今日は特別な日だ。

電車に揺られとある墓所をめざした。

「管理人さん、おはようございます。」

「おはようございます、大本さん。」

そうですか、今年もそんな時期になりましたか。」

「ええ、一年というものは早いですね。」

・・・それでは、失礼します。」

そんな彼の後姿を和尚さんは寂しそうに見送った。

毎年、わざわざ時間をずらして一人で朝早く来る少年を・・・

「父さん、母さん久し振り。」

俺、中2になったよ。

高校生になる前にあの家を出ることを

檜原夫妻にはつきり伝えてきたんだ・・・。

そうそう、これは毎年言ってるけど

本当に運命って皮肉なもんだよね。

父さんと母さんが死んだ日と一緒になんて。

・・・母さん

俺、母さんとの最後の約束を守るよ。

たまに挫けそうになるけど頑張ってるよ。

・・・だから、見守っていてよ。」

そして、彼は立ちあがって同じ墓所の中にあるもう一つの場所に  
向かった。

それは檜原夫妻のもう一人の子ども

晴也と先ほど話に出てきた鈴蘭の双子の姉、 檜原 霞 《ひの  
はらかすみ》の墓へ

「霞、ひさしぶり。

すまないな、花も線香もあげられなくて。

俺だって考えているんだぞ。

鈴蘭の機嫌を損なわなかったためにどうすればいいか。

本当に悪かったな俺のせいで

お前の大切な妹を苦しめて。

自己満足かもしれないけど

俺にはこれしかできなかったんだ。

俺を恨んでもいいけど彼女だけは許してくれよ。

来てほしくないだろうけどまた来年もくるよ。

・・・またな。」

そうして彼は帰って行った。

その後ろ姿は悲しみで満ちているのが誰の目から見ても明らかだった。

## 第二話

「かすみちゃん、すずらんちゃん、そとにあそびにいっしょよ。」

なんて懐かしい夢

あの悪夢の夢じゃないの。

「うん、いいよ」

行っちゃ駄目お姉ちゃん

あなたはこのあと事故に巻き込まれてしまうのよ

「おねえちゃん、はるやくん、かってにそとにでかけたらだめだよ。」

あいつのことはどうでもいいけどお姉ちゃんは駄目

そうよ昔の私、もっと強く止めなさい

「なら、おかあさんがいたらいいよね。」

駄目よ、そんなことしたら

このまま運命を進むと同じことになってしまっ。

「うん、それならいいかな」

・・・そうね

これは夢だもの

「はるやくんのおかあさん、そとにあそびにいきたいよ」

そう、ここでお姉ちゃんが小母さんを誘いに行った。

小母さんは優しい人だった

「わかったは、それじゃあ外に行きましょうか。」

優しい小母さんは

私たちの願いを断れるはずがなかった。

「ぼく、キャッチボールがしたい。」

そう、ここであいつがこんなこと言ったから

あいつがキャッチボールをしたいなんて言わなければ

「わかったわ。それじゃあ公園に行こうか。」

せめて別のことをしていたら

未来は変わっていたのかもしれないのに

そして、私たちは近所の小さい公園に向かった。

悲劇の始まりに……

「ねえ、かすみちゃんキャッチボールしよ。」

風景が変わった。

『軽々しくお姉ちゃんの名前を呼ばないで』と言いたかったけど声が出るはずがない。

「うん、はるやくん。」

このころの私は体が弱く

たいてい見てばかりだった。

「あ、ごめん、かすみちゃん。」

あいつがボールを公園の外に出してしまった。

そんなお姉ちゃんに『いかないで』と叫んでいる今の私がいる。

「いいよ、はるやくん、とっってくるね。」

心配性の小母さんは急いでついていった。

その少し後ろにやっぱり心配になったあいつが付いていった。

「霞ちゃん道路に出ると危ないわよ。」

そういつて歩道に出てきたばかりの小母さんの声を聞いて

路上にでていたお姉ちゃん振り返った瞬間にトラックのクラクションが鳴った。

「危ない、霞ちゃん。」

小母さんが路上に出ていたお姉ちゃんをかばっていた。

次の瞬間トラックにひかれていた二人

「おねえちゃん。」

その後からの記憶はない。

事故の夢が終わった。

なのに、死んだはずのお姉ちゃんが寂しそうな顔をしてこっちを見ているのだ

「なんでお姉ちゃん、私の夢の中でそんな顔をしているの。」

そう問いかけると

お姉ちゃんは消えて

夢は覚めていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

「起立、礼」

今日、 大本 晴也 《おおもとはるや》は

朝、墓参りに行ってからあいつは学校に来なかった。

いい気分だ。

あいつの顔なんて見たくないから。

6年前のあの日

私から大切なものを奪っていった。

私の双子の姉を・・・

あの日・・・・・・・・

だから、私はあいつの居場所を奪ってきた。

私の目の前から消えるまで・・・

それにしても懐かしい夢を見た。

6年前の事故の日の夢

だから、あたしは今朝、墓参りに行くことができなかった。

学校が始まる前に一度行くつもりだったのに・・・

あんな夢を見たら行きにくくなってしまったので

学校が終わってからにすることにした。

あの夢を見てしまったから・・・

「鈴蘭、今日部活は行く。」

「ごめん、今日は用事があるからいけない。」

先生には伝えてあるから。」

「そう、分かったわ。」

にしても今日あいつ来なかったわね。」

ついに学校に居づらくなって不登校にでもなったのかしら。」

「さあ、私には関係ないわ。」

あんな人殺しのことなんて。」

「・・・そうよね。」

あいつのことを話題に出したことに怒っている私を見て

事故の前から昔からの幼馴染の水家 由季みよちゃんは

その話をするとはなくなった。

あのあと私はあいつが自分の母親とお姉ちゃんを殺したことを言い  
ふらし

あいつはそれから虐められるようになり

学校には居場所がなくなった。

当然だ。

私からお姉ちゃんを奪っておきながら

ただ普通に生きていくことを私は許さなかった。

そしてこれからも許す気はない。

「それじゃ、由季またね。」

「また明日、鈴蘭。」

私は一度、家に帰って父さんと母さんと一緒にお姉ちゃんの墓参りへ

父さんも毎年この日は仕事を休んでいることが多い。

そして私が家に帰ってから

一緒にお姉ちゃんの墓参りに行く。

あの日から私は一か月ほど目を覚まさなかったそうだ。

お医者さんによると

確証はないが双子であるお姉ちゃんが死んで

精神的にショックが強すぎたために目を覚まさなかったのではないか。

そして何らかの要因によって目が覚めたのだろつと言っていた。

そして、今、その墓の前にいる。

「お姉ちゃん、久し振り、元気にしてた。」

そう問いかけても帰ってくるっことがないと分かっているのに話しかけてる私がいる。

「あれからもう6年も経ったんだね。」

いや、6年しか経っていないんだね。

私、綺麗になつたでしょ。

もし、お姉ちゃんが生きていたら同じ顔していただろうから、

学校で双子の美人姉妹で有名になっていたかもしれないね……

ねえ、お姉ちゃん

夢の中でどうしてあんな悲しい顔していたの。」

そんな話をしている私に悲しそうな両親がいた。



### 第三話

「晴也、昼だぞ。起きろ。」

・・・ああ

今は学校か

そして、ここは屋上だ。

私が教室にいとクラスが重苦しい空気に包まれるから

学校にはいるが教室にはいない。

これは教師内でも暗黙の了解になっていて

授業を平穩に済ませたいという教師しかいないので

私が授業を受けてなくても別に咎める教師はいない。

その対価としてある程度の成績は必要だが。

「なんだ、また岩城さんですか。」

君も物好きですね、こんな殺人鬼のところに足を運ぶなんて。」

そう私は二人を殺した。

だから彼女の噂も否定しないし

噂が誇張されるのも予想の範囲内だ。

この前私が耳にした噂だと。

小学生の時に自分の家族を殺して

その後小学校に出刃包丁を持って行って

さらに人を切りつけて殺した。

その時に亡くなったのが彼女の姉だった。

今は少年院から出てきて保護観察期間で出てきている。だったかな

まあ普通に考えるとかなり際どい話ではあるが

真実はここまで滅茶苦茶に伝わっているのだ。

それを私は否定する気もないし肯定する気もないから

彼女が私の噂を流すためびに周りは離れていくのに

岩城さんはその噂を聞いても離れていかない珍しい人だ。

「おいおい、俺のことは和寿と呼べって言っただろ。

俺たち友達なんだから。」

「いや、こんな殺人鬼だと噂が流れている流れている私に

下の名前でなれなれしく呼ばれるのは嫌でしょう。」

「俺は噂は基本的には信じない人間なんだ。」

他人の評価に関しては絶対に信じない。

それは色々な人間の思惑があつたりするからな。

俺が自分の目で見て、接して話した結果

お前はそこまで悪い人間ではないと思えたからな。」

「そうですね。なら勝手にして下さい。」

「ああ、そうさせてもらうよ。」

・・・なあ晴也いったい何があつたんだ。

檜原のお前に対しての扱いは普通じゃないぞ。

普段とても公正で活発な

学園で有名な檜原鈴蘭が

彼女がお前の話になると

態度が全部変わるからな。」

「それに関しては噂の中にも真実は含まれていますからね。」

「うん。」

それは『姉を殺された。』あたりのことかな

でないと彼女が晴也を恨む理由にはならないからな。

それに『家族を殺した。』と『姉を殺された。』の件はどの噂にでも絶対出るからな。」

「ええ、そうですよ。」

実際に私は殺人鬼ですからね。

クラスの人間から悪い噂を流されなくなかったら

近づかないことをお勧めしますよ。」

「いや、俺を強請ろうとする人間は

この学校内ではないと思うぞ。」

「そうでしたね。」

情報屋の岩城和寿いわきかずひさ

校内での噂はすべて把握していて

かなりの情報を持っている。

教師でさえも手が出せませんからね。

そんなあなたのことです。

ある程度のことは知っているでしょう。」

「だから言ってるだろ。」

俺は噂は信じないし自分である程度の

確信を得ない限り信じれないんだ。

ましてやこの噂に関しては

要らない噂が流れすぎていて

特定しきれていないんだ。」

「そうですね。」

それなら、檜原さんには感謝しないといけませんね。」

「お前の悪い噂しか流していない人間に

感謝するのはどうかと思うが……。」

「いいんですよ。」

真実もある程度混ぜていますからね。

私が殺人鬼という真実さえ

私自身が忘れることができないのなら。」

「・・・なあ、

ここからは俺の独り言だ。

嫌なら聞き流してもらってもかまわないけど聞いてみるか。」

あまりの真剣な顔に私は頷くしかなかった。

「決まりだな。

まず、これはあくまでもおれの主観だ。

おかしいと思っても聞き流してくれ

俺は情報を集めている。

これはさつきもいったが

その中で困ることがあるんだ。

それは、その情報に対して否定的な意見が全くないこと。

そんな噂が流れたときにそれをみんな信じてしまう。

その噂が間違っていとしてもな。

しかし、もしその噂が真実ではなかったとしたら。

そしてその噂の発信源が嘘だったり騙されていて

その噂が嘘であったとしたら。

しかし、その噂を調べようにも

否定的な噂が全くないから

どのように調べればいいのか分からない。

どんな歴史にも必ず否定的な意見はある。

『上杉謙信が実は女だ』とか。

そういった感じで

しかし、それによって実は否定的な噂のほうが真実であった場合

歴史は後から本なんかで調べたものだから

曲げられていても調べにくいんだ。

それはそうだ。

その現場にいた人間でしかその真実は分からないんだから。」

「それなら、私の噂は確定しているじゃないですか。」

その現場を見た人間が『私が殺した。』と言っているのだから。」

「そうだ、だから俺なりにあの噂のことを調べてみたんだ。」

どんな事件があつてそのどのようにして起きたのかも。」

「なら、なおさら確定じゃないですか。」

『それが真実だ。』それでいいじゃないですか。」

「ああ、調べてみて俺もこれでいいと思ったよ。」

けどな、お前と話をしているとおかしいと思えてしまつたよ。」

俺が調べた情報で正しいはずなのに

俺の勘が違つていつてるんだよ。」

「気のせいですよ。」

にしても凄いですね。」

みんな、噂がいろいろ流れているから真実にたどりつけないのに。」

とつかだれも真実を調べようと思わないのに

そこまで調べてしまつたなんて。」

「まだ真実とは思わない。」

絶対にこの出来事には裏がある。

俺はこの真実を見つけるまであきらめない。」

「そうですか。」

まあ、違う噂が出てくること楽しみにしていますよ。

それはそうと授業はいいのですか。

私はいいとしてあなたは・・・

そうでしたね。

情報屋の和寿

教師も手が出せませんでしたね。」

「そういふこと。」

俺もここでサボリ。

だってこんな秋の入ったばかりで外で寝れたら

どれだけ気持ちいだろうかなんて日に

教室に籠って授業なんて受けていられるか。」

そうして私の学園生活は進んでいく

これから何が起こるかはわからない。

だが信じてくれる人がいるのだと

私の押しつぶされそうな気持ちが少し軽くなった。

そんな、新しい出会いと友情が生まれた春風そよぐ空の下

運命の歯車は少しずつ回り始める。

それは誰にも止められなくて

ただ動いているだけで

止めることはできない

止めたのならば

その歯車は壊れてしまつから

誰もが歯車の一部なのだ

見えないところで歯車は動き続ける。

それが自分の意思でないとしても・・・

## 第四話

次の日の昼休み

「ねえ、今日あいつ来てるらしいよ。」

私はその話を聞いていい気分ではなかった。

「え〜、なんだ不登校になったわけじゃないのね。」

「そうだって、ただ体調が悪くて休んだだけらしいよ。」

「つまんないの。」

あいつがいるとクラスの空気悪くなるのよね。」

そういつて私は席を立った。

その瞬間、話は止まった。

周りに軽く会釈をして

そして私は教室から立ち去った。

私は昨日のことを

あいつに糾弾するために

なぜ、昨日学校に来なかったのかを・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

そこで岩城君が私がここ数年の疑問をぶつけていた。

彼はこれだけひどい噂を流されていて

どんなにクラスから虐めにあっても

どんなに私に冷たく罵られようとも

彼は決して私を責めることはなかった。

彼はただ黙って『すべては自分が悪いんだ』

といった空気を醸し出していた。

それを誰も確かめようとしなかった。

いや、すべての真実は噂の中にあると

私のいったことが真実だと

私が嘘を言うはずがないといった感情があるから

みんな私の言葉を信じているから

だからみんなも彼を責めた。

彼は肯定も否定もしないから……

無言でいるということは

大抵、肯定として取られる。

彼はそれを知っていたからそんな態度をとったのだろうか……

私はいてもたつてもいられなくて

屋上の扉を勢いよくあけた。

「ねえ、昨日はどこに行っていたのよ。」

いきなり開けられた扉にあいつは驚いていたが

私はそんなこと知らない。

私は真実が知りたいのだ。

「檜原さん、いきなりどうしたのですか。」

あなたが、私のところに来るなんて、

これは明日は雪でも降りますかね。」

「誤魔化さないで。」

どうして昨日休んだのよ。」

朝一番で墓参りに行っていたのはわかっていたのよ。」

それから学校に来ることだってできたじゃないのよ。」

「おや、私が学校に来たって来なくたって

たいして変わらないじゃないですか。」

「・・・そうよね。」

あなたはいつも真実を話さない

隠し事をするときは煙に巻く。

決して喋らない。」

「そうですね。」

否定はしませんよ。」

それがどうしたのですか。」

それであなただけは何が聞きたいのですか。」

本当に私が休んでいた理由ですか。

私は元から昨日は休む気でしたよ。

だから小母さんに学校を欠席することを伝えてましたしね。

これでいいですか。」

「いいわ。

もうあなたには何も聞かない。」

「そうですね。

それをお勧めしますよ。」

私ははぐらかされたまま私は屋上から離れていった。

.....

.....

.....

「あゝあ、あんな言い方しなくても良かったんじゃないの。  
ってなに笑っているんだよ。」

「え・・・」

私は笑っていますか。」

そう、彼女からこうやって話しかけられたのは  
何年振りでしょうかね。

かれこれ2年いや3年ぶりでしょうかね。

ずっと無視されてましたし、

恨まれているにしても

話しかけてもらえたのは嬉しかったですね。

「まあ、なんで笑っているのかは聞かないことにしても

あれは更に怒らせる元になるんじゃないの。」

「いいんですよ。」

あれで、また生きる気持ちが続くのなら・・・」

「あの例の事件の後の出来事か・・・

けど、あのあと彼女は意識を取り戻したと調べてけど・・・

もしかして、そこに何か真相が隠されているのか。」

「違いますよ。

彼女は自ら私に復讐するために

大切な人が死んだことを受け入れ

意識を取り戻したのです。

それだけは間違いありませんよ。」

そう、彼女は私に復讐するために

戻ってきたのです。

これだけは真実なのだから・・・

「そうそう、

もし仮に他に真実があつて

その真実が分かったとき

あなたはどうしますか。」

「どうするかって

どういう意味でだ。

隠す気はない。

もしそれでお前を助けることができるなら

それを公表させてもらう。

俺とおまえはもう友達だ。

俺から言えるのはそれだけだ。

そして今の発言で俺は確信した。

まだ、他に真実がある。

俺はその真実に辿りついてみせる。」

「それが、人を傷つけることになってもですか。」

「知らないことによって苦しんでいる人がいるかもしれない。

言えないことによって苦しんでいる人がいるかもしれない。

そんな、苦しい嘘は断ち切ってみせる。」

優しいですね。

けど、真実を知っているのは彼女のほかに

私と彼女と彼女の両親しかいません。

ということはどこに行くのかもわかりきっていますね。

先に手を打たせてもらいましょうか。

「わかりました。

そこまで言うのなら私はあなたが真実を知ろうとすること止めませ  
ん。

では、私は用事があるから先に帰らせてもらいます。」

「あれ、鞆は取りに・・・

って教室にあつたらボロボロになってるか。

持っているんだな。

分かった用事なら仕方ないな。

それじゃあまた。」

さて、私はいろいろ行動を起こさないといけませんね。

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

放課後、私は一人の人間を待ちながら一人

昼休みにあったことを悔しがっていた。

あの人は6年前のことで何かを隠している。

それだけは間違いないのに決して話すことはない。

私は知りたいのよ。

6年前の真実を

どうしてお姉ちゃんは悲しい顔をしていたのか。

その理由を・・・

私はどうすればいいのか。

私一人では両親は口を開いてくれない。

私一人では病院がどこにあるのか分からないし

第三者からの視点も必要だ。

そして同じ疑問を持った人間

それは今までいなかった。

しかし、その人間が今日、初めていること知った。

私はそのために一人の人間を待っていた。

教室の扉が開いた。

「待っていました、岩城君。」

それが、私にとってつらい真実だとしても。

私は知りたいのです・・・

## 第五話

「待っていました。岩城君。」

私は待っていた彼を。

「なんだ檜原、俺に何か用か。」

「まあ、もう予想がついているかもしれませぬね。」

6年前の真実を私は知りたいたいですよ。

手伝っていただけませんか。」

少し不審そうな眼をして彼はこう問いかけてきた。

「真実って檜原の言っている事じゃないのか。」

もちろんこう返されるのは分かっていた。

「ええ、私の話が真実である確証がほしいのですよ。」

そう、それは違つとわかっている。

ただ私にはこう答えるしかできなかつた。

証拠がなくていま、私が違つと言ってしまうと

自分が壊れてしまいそうな気がしたから。

「わかった、自分の理論に反対と言ってもらう必要があったしましてや、あの現場を見た人間がいるならそれを確認してもらいながら検証できる。」

俺は否定の証拠を探す。

檜原は肯定の証拠を探す。

それがどのようなことになっても俺は保証しない。

それでいいなら俺は別にいい。

けど、もし檜原の立場が不味くなっても俺は知らない。

それによってトラウマが蘇ってきてても補償はしない。」

そう、彼は私の心配をしているのだ。

真実が分かった場合

彼は全てを公表する気にいるのだ。

それによって私は苦しむだろう。

私の最悪とも言える過去とたどるのだ

トラウマと衝突するのは必然だろう。

それでも彼は確かめるのかを聞いている。

「もちろんそれは覚悟の上です。」

「分かった。」

けど、今日はもう遅い。

調べるのは週末からだ。

お前の父親や母親に一人で

聞こうとするなよ。

絶対に何もしゃべらないからな。

それと、晴也が夕食と一緒に食べない日が分かったら連絡をくれ。

その日に俺も話を聞きたいから。」

「分かったわ。」

といってもあの人は基本的に夕食と一緒に食べませんよ。

家にいないか部屋にこもっていますから。」

「それは好都合だ。」

できるだけ早い方がいいけどな。」

「そうね、

これが連絡先です。

それでは、また連絡します。」

こうして即席ながらも同盟を結んだ。

真実を知るために・・・

.....

.....

.....

.....

その次の週の土曜日の午後

私は岩城君と事故現場に来ている。

そしてここが事故のあった公園。

私は事故のあった日からこの道を通らなくなった。

あの日の思い出が蘇ってくるから

それが辛いからあえて通らなかつた。

今そのトラウマと向き合っている。

「檜原、大丈夫か、さすがに顔色が悪いぞ。」

「いいの、その覚悟があつてここに来たの。」

いいから始めるのよ。」

そこから私はこの公園の中であの事件で何があつたかをすべて話した。

「分かつたかしら。」

あの事件で何が起きたのか。

今が真実よ。」

「辛いことをその現場で話してもらって済まない。」

けど、これで先に進むことができるし  
いろいろ確認することが出てきた。

何か、今話していて違和感はなかったか。」

このセリフを聞いて私は無いとは言い切れなかった。

この公園に訪れてから頭が痛いのだ。

頭を抑えている私をみて岩城君が

「今日はこれ以上確認するのは無理だ。

今日は花だけを置いて帰ろう。」

「すみません。では、事故現場に行きましょう。」

そう言っつて私は現場を目指した。

そこには真新しい花が添えてあった。

「きつと檜原の小母さんたちだろ。」

と岩城君が言った。

私は釈然としていなかった。

そして私たちが花を添えようとしたとき

後ろからおばあさんに話しかけられた。

「あなたたちもここでだれか失ったのかい。」

「あ、はい」

といつても俺じゃなくて彼女ですけど、

俺はただの付き添いです。」

「そうかい。」

もしかして6年前のあの事故かい・・・」

「おばあさん、あの事故について何か知っているのですか。」

「ああ知っていると」

私の家の前で起きたからね。」

「おばあさん、その日の話を聞いていいですか。」

「・・・いいよ、」

少し長くなるかもしれないから家においで。」

「すみません。」

檜原どうするか。

辛いなら帰ってもいいけど。」

「行きます。私も聞きたいから。」

「わかった。おばあさんお願いします。」

「それじゃあ、おいで。」

俺たちまるでレールの上に乗ったように

あまりにも順調すぎて怖いくらいに真実に近づいていく

運命に作られたレールの上を進むように……

## 第五話（後書き）

ついに物語も真相に近づいています。

ついでにもしよろしかれば感想をください。

これからの参考にさせてもらいたいと思いますので。

## 閑話

「すずらんちゃんは、うたをうたうのがじょうずだよね。」

・・・懐かしい夢ですね。

私の平和な日常だったとき・・・

「おせじでも、はるやくんにほめられるとてねちゃっよ。」

「ほんとうだよ。」

ようちえんでうたったうたのこのなかで

すずらんちゃんのうたごえがいちばんよくきこえていたよ。」

「うれしいな。」

はるやくんありがとう。」

「ねえ、はるやくんすずらんばかりほめてないで

わたしもほめてほしいよ。」

「おねえちゃんはいつもみんなからほめてもらってるでしょう。」

「いいじゃん、わたしだってはるやくんにほめてもらいたい。」

もしかしたらあんなことがなくて

もしだれも死ななかつたら

こんな幸せが続いていたのでしょうか・・・

「ねえ、ふたりでうたってよ

きょうようちえんでうたうたうたを。」

「いいよ。」

おねえちゃんもいっしょにうたおうよ。

それでいっしょにほめてもらおうよ。」

そうしたら霞の顔は明るくなって

「わかった。」

なら、はるやくんもいっしょにうたおうよ。」

さあ、夢から覚めないと

小父さんたちに話しておかないと

いけないことがありますからね。

一度言った言葉を曲げてしまうので小父さんたちには悪いかもしれませんが

きっと彼女の手によって私は死ねるでしょう。

間接的であっても・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

「小父さん、小母さん、鈴蘭に真実を話したいと思います。」

だから願いましう彼女が幸せであることを・・・

終わらせましょう物語を

あの日三人で唄った歌、ハレルヤ・・・

彼女の優しき歌声が永久に響かんことを願いながら・・・

たとえ私という怒りの対象がいなくなっても生きていけるように

主を讃えよ。

今、私は彼女に向けて歌おう。

自らの過去に向き合う彼女を・・・

## 閑話（後書き）

感想や間違いなどがあった場合  
教えてもらえると嬉しいです。

## 第六話

「さて、どこから話そうかね。」

「その前に一つよろしいですか。」

「何かね。」

「あの花はまだ真新しかったんですけど

あの花を置いて行った人のことはわかりますか。」

私はもうひとつ疑問に思っていたことを聞いてみた。

そうしたらおばあさんは悲しそうな顔をしてこう話し始めた。

「あの花かい。」

あの花はね、二週間に一度あの事故で母親と幼馴染を失った少年が置いて行くだよ。

それも決まって土曜日の朝一番にね。

ああ、あと二人の命日にね。

もうあの習慣も五年になるかね。

その少年の後ろ姿がね・・・

ものすごく悲しそうなんだよ。

最初は花が新しくなっていることに気がついたとき

いつ来ているのかが気になってね。

それから何度か後ろ姿を見ているとほっとけなくなっ  
てね。

あれじゃあ、あの子のお母さんも幼馴染も成仏できないよ。

あれだけ思ってもらっているのは嬉しいだろうけど

あんな悲しい姿を見ていると

不安になってきつと眠っていられないよ。」

私はその真実を知って予想が当たった。

彼はずっと向き合っていたのだ。

あの事故とたった一人で・・・

「もうひとつ質問してもよろしいでしょうか。」

「なにかね。」

「彼は命日に来ましたか。」

「いや、珍しくの来なかったわね。」

毎年、昼前にきて日が暮れるまであの公園に残っているのに。」

・・・彼はここには来ていなかった。

では、どこに行っていたのだろうか・・・

「今それを考えても仕方がないぞ檜原、

おばあさん、事故の話のほうを願いますか。」

「いいわよ。

私が見ていた一部始終を教えましょうか。

その前にどうしてその現場のすべてを見ていたのかを話させてもらおうかね。

あの日は天気が良いね。

二階に縁側があるんだけど

私は外を眺めながらお茶を飲むのが好きでね・・・

あの日も公園の桜が綺麗でね

そんな中一人の女性に連れられた

4人の子供が楽しそうにやってきましたんだよ。

男の子が一人髪の長い女の子が2人で

髪の毛の短い女の子が一人そ手を引かれてきたのよ。

最初は髪の毛の短い女の子と髪の毛の長い女の子がキャッチボールをしていたんだよ。

髪の毛の短い女の子はあんまり投げるのが上手じゃなくてね。

男の子がよくボールを取りに行っていたんだよ。」

この発言を聞いて私は少し驚いた。

私の記憶の中にはそんなこと全くなかったのだ。

「おばあさん、それは本当ですか。」

「ああ本当だよ。」

それから髪の毛の短い女の子としていたわね。

男の子だったために失敗していたけど

男の子はゆっくり球を投げていたしね。

そこまで遠くにはいかなかったよ。

男の子もしだいに疲れてきたんだらうね。

それでもう一人の髪の毛の長い女の子は何か用事でもあったんだらうね。

事故が起きる前に帰ってね。

そのあとに

ベンチに座っていたもう一人の髪の長い女の子に

男の子が投げてもらったのを代わってもらったんだよ。

髪の短い女の子の投げた球がたまたま道路に出てね。

それを髪の長い女の子が取りに言ってね。

女性は不安になってついて言ったんだよ。

そのあとに続くように男の子もついて行ったのよ。

そのあとに車のブレーキ音が聞こえてね・・・

玄関の扉を大慌てで外を見てみると

男の子が母親と髪の長い女の子の名前を叫びながら

「必死に死なないで。」と叫んでいてね。

わずかに息のあった母親と何か話してて

見ていて痛々しかったよ。

男の子は自分のせいだって搬送されているときにずっと呟いていてね。

公園の中では髪短い女の子が

立ったままどこを見ているか分からない眼で涙を流していてね。

あれは気を失っていたのじゃないかね・・・

その子の足元にはグローブが落ちていてね。

それが更に悲しみの深さを物語っているようだったよ・・・」

「おばあさん、今の話本当ですか。」

私は信じたくなかった。

今の話に真実が秘められていたのだから。

色々と私の記憶と食い違っている。

髪の長いもう一人の女の子は誰・・・

髪が短い女の子は私だ。

そして私はお姉ちゃんを・・・

「ああ、あの男の子を見るたびに私はあの日のことが鮮明に蘇るよ。

決して忘れられないからね、あの悲惨な事故を・・・」

ああ、やはり真実は違っていたのだ。



すぐに探さないと・・・

そう思って飛び出そうとした私に岩城君が

「ちょっと待った、檜原

確かにあいつ探すのは重要だ。

だけど、先に俺たちは真実を知らなくてはならない。」

「どうしてよ。」

私たちは真実を見つけた。

だからあの人を探さないと・・・」

「少し落ち着け。」

お前はそう思ってもまだ謎はあるぞ。

髪の毛長い女の子は誰だ。

どうしてお前はあいつが事故を引き起こしたと思ったんだ。

どうしてあいつが犯人だと思ったんだ。

それにあいつの居場所が今はわからない。

今からお前の親のところに行くぞ。」

私はただ頷くしかできなかった・・・

「おばあさん、話してくれてありがとうございます。」

「なあ、年寄りからのお願いがあるんだけどいいかね。」

「・・・なんですか」

「あの子を助けてやってくれんかね。」

あの子はこの6年間

ずっと心につらい思いをため込み続けていたんだと思うのよ。

あの姿を見ていると死者も救われやしない。

それくらい辛そうだったんだよ。

ずっと見ていたからね。

自分の孫のように思えてきてね。

助けてやってほしいんだよ・・・」

「わかりました。絶対に助けて見せます。

行くぞ、檜原

すべてを知るために。」

「・・・分かったわ。」

私だっすべて知りたい。」

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

「きたか、鈴蘭・・・」

「・・・お父さん、・・・お母さん

教えて、あの日何があったかを・・・」

「いいだろう」「俺はここで」「いや、岩城君もここにいてもらって  
てくれないか。」

「・・・いいんですか。」

「ああ、私たち夫妻の願いだ、最後まで聞いてくれ。」

「今日の日、真実が明かされる・・・」

## 第七話（前書き）

間違えて9話を先に  
投稿してしまいました。  
申し訳ありませんでした。

## 第七話

その週の土曜日の午後、私はクラブ活動で鈴蘭がいないのを見計らって

小父さんと小母さんに話があった。

「小父さん、小母さん、話があります。」

「・・・何かね。晴也君。」

「すみません。」

檜原さんがどうやら自分である日のことを調べ始めようとしています。」

「それは、鈴蘭の意思かい。」

「それはわかりません。」

ここ一年位、疑っていたのは分かっていました。

しかし、今日、その思いに火をつけてしまったのは私です。」

「それで、鈴蘭は調べようとするのは何故かね。」

「その場で少し前に岩城君という人物と話していましたね。」

彼と話していたのですが。

彼がああ事故のことについて私に疑問をぶつけてきましたね。

それを聞いていたのだと思います。

彼も真実を探そうとしています。

今まで彼女の出して噂を周囲は信じて誰も調べようとしませんでした。  
た。

彼は情報屋みたいなことをしていました

事故のところまでたどり着きました。

それによって彼女はある意味、味方を得ました。

自分の間違っている記憶を打ち壊してくれるかもしれない人物を・

・  
今週はクラブ活動で彼女は動けません。

しかし、彼女はできるだけ早く知りたいと思っています

来週は確かありませんでしたからね。」

「晴也君・・・」

君はどうしたいのかね。」

「彼女に真実を話して下さい。

ここにたどり着く前にたぶん彼女は岩城君に彼女の真実を話します。

彼女は私に発破をかけられたように真実を知ろうとしています。

彼女はそれでも真実に向き合おうとしています。

私が真実を話してもいいのですが・・・

それができない用事が入っていますから・・・。」

「待つてくれ晴也君、君はいないということかね・・・。」

「はい、その代わりに一緒に呼んでほしい人がいるのです・・・。」

私は日曜日にその人に話をつけるために予定をつけていた。

来週の休みに話してもらうために・・・

.....

.....

.....

.....

そして日曜日

「今まで嫌な役回りをさせてすみませんでしたね。」

「いいわ、鈴蘭は私の大切な友達だしね。」

・・・どうしたの、あなたから私に接触するなんて。

鈴蘭に知られないために重大なことでも起きない限り二人で会わないと言ってたのに。」

「いやですね。」

どうやら檜原さんが最近・・・

いえ、ここ1年前位から自分の記憶に関して

疑問を持ち始めたみたいなんですよ。」

「ふん

それで私はどうすればいいの。」

「すみません。」

たぶん今週の週末に岩城君と動き始めると思います。

そこで真実を知ってしまうと思います。

たぶん、小父さんや小母さんに話を聞きに行くでしょう。

しかし、私は今週から少し忙しくなるのでその場にいません。」

「なに、どこか行くつもりなの。」

「まあ、この話は少し他所におきましょつ。」

そして、お願いがあるのです・・・」

・・・

・・・

・・・

・

「お父さん、お母さん聞きたいことがあるの。」

私は真実を知るため家に帰ってきた。

「隣にいるのは岩城くんですね。」

晴也君からは話は聞いてます。

座ってください。」

「・・・失礼します。」

「さて、二人とも気が付いてるかもしれないが  
晴也君から君たち二人にあの日何があったのか話すように言われて  
いる。」

その前にもう一人この家の中で起きたことを伝えなくてはならない  
人物がいる。

・・・水家さん入ってもらっていいかね。」

そうお父さんが告げると由季がそこに立っていた。

「由季・・・」

どうしてここにいるの。」

私の頭はあまりのことに付いていかなかった。

どうして由季がこの場に来たのか

由季には確かに私の真実を話した。

しかし、それによって彼女もいつしよにあいつを怨んでいると思っ  
ていた。

「私はあの日、事故の前の間を見ていた。」

私もすべてを知っていた。」

「おばあさんの話していたもう一人の髪の長い女の子は水家だった

のか。」

「私は事故の起きる前に家に帰った。」

鈴蘭、貴方は私とキャッチボールをしていたことを忘れていた。」

「由季どうしてよ。」

どうして私に話してくれなかったの・・・」

「晴也に止められていた。」

鈴蘭は姉を失ったことによって生きる気力を無くした。

なににせよ彼女は生きる意味を見つけた。

それで彼女が生きていけるのなら

私はどんな罰でも受ける。

それが私の罪滅ぼしだから・・・

と喋ってたから。

二週間も鈴蘭が寝込んでいた。

それが晴也には耐えれなかった。

あの日・・・」

「水谷さん私が話そう。」

あの日の事故の真実となぜこのようになったのかを・・・」

## 第八話

「さあ、どこから話そうかな。」

そう言ってお父さんは悩み始めた。

「すべてを話してくれ、檜原の小父さん。」

「わかった。」

少し長くなるが大丈夫かね。

私も晴也君に聞いたことも入っている。

おかしいと思ったら言ってくれ。」

そう言ってお母さんが

皆にお茶を持ってきてお父さんの横に座った。

「さあ、私の知っている中での日あったことを話そうか。」

.....

.....

.....

.....

「あの日は晴也君のお父さんの命日だな。

ちよつと一周忌だったんだよ。

晴也君のお母さんはとても晴也君のお父さんを愛していたからね。

晴也君のお父さんが亡くなった時はほとんど生きる気力もないくらい憔悴していたんだ。

そこから晴也君のために何とか立ち直ったんだ。

しかし、命日の日はやっぱり辛そうだな、

晴也君のお母さんはとても落ち込んでいたんだ。

それが晴也君からしたら見ていられなかったんだだろうな。

晴也君は昔から周りの人の気持ちにとっても敏感だった。

それで、晴也君はお母さんを外に出すことにしたんだ。

晴也君は昔から体が弱かった。

最初はみんなで買い物にでも行くつと言おうと思ったんだろう。

そこで霞がキャッチボールをしようと言いだしたんだ。」

「え……」

「そう、キャッチボールをしようと言い出したのは霞だ・・・」

「そして、晴也君は

『キャッチボールをしていてぼくがしっぱいしたせいがかすみちゃんが生んでしまった。』

と自分が目が覚めて鈴蘭の様子を見ているときに私たちに告げただ。

私たちは許せなかったんだ。

霞が死んだこと、

鈴蘭、お前が意識を取り戻さない状態になったこと。

その少ししてお前は意識を取り戻した。

お前は晴也君に憎しみを抱きながら。

晴也君が何かしたのだろう。

誰も口には出さなかったが私には確信があった。

彼がどうやってお前の意識を取り戻したのかは知らない。

しかし、私たちは半年もしないうちに次第に申し訳なくなってきたんだ。

晴也君だってわざとではないし彼だってお母さんを失って辛かった。

霞とだって物凄く仲も良かった。

彼だってショックを受けていないはずがなかった。

私たちは彼を責めたことを恥じた・・・

葬式の一週間後、彼はここからそこまで遠くない親戚の家に預けられた。

いや正確には違うな。

正確には半年間、虐待を受け続けた。

彼は引き取られてから一週間後あの二人の亡くなった公園の片隅でろくに食事もとっていない状態で保護されたんだ。

その時、彼は『ごめんなさい。ごめんなさい』と呟いていたそうだ。

そこで私たちはあまりにも彼がかわいそうに思えて引き取ったんだ。

これが私たちの知っている真実だ。

しかし、私たちも彼がまだ何かを隠しているそんな気がしてならぬんだよ。

私たちは何か取り返しのつかないことをしたのではないかと思っ  
ているんだよ。

水谷さん、岩城君、鈴蘭、

何か知っていること間違っていることがあったら言ってほしい。」

そこで由季が

「私の知っていることと少しだけ違うことがある。」

彼女の声も震えていた。

「確かに晴也は外に出るのに誘った。

けど違うのはそれは本来一人で決めたことではなかった。

相談されて『外に遊びに出たら』と勧めたのは私……」

もうひとつ驚愕の事実が由季の一言から出てきた。

その一言にみんな驚いていた。

そして、岩城君と私はあまりのことにさらに驚いていた。

すべての真実を知ってしまった私たちは皆にどのように話せばいいのか言葉が出なかった。

彼は全く悪くなかったのだ。

悪いのは岩城君を除くここにいるすべての人間であるということ。

彼はお母さんに元気を出してもらったために外に出ようと誘っただけ・

・

しかもそれは周りからの助言を受けた故であった。

私の記憶は全く違うのではないかと思ってしまった。

私の記憶の中では由季は出てこなかった。

「ねえ由季。」

あなたは事故の直前に何があったのか知っている。」

そういつて由季は首を振りながら

「知らない。」

私は事故の前に家に帰ったから・・・

事故の真相は晴也から聞いていたから。

晴也が霞を殺したからって私は晴也を憎みきれなかった。

晴也は私に『すずらんちゃんのをばにいてあげて』と言って去っていった。

それから彼は引き取られて檜原家に保護されてから私とは滅多に話すことはなくなった。

そして、私はキャッチボールをしようと言い出したのは彼だと聞いていた。

霞と晴也だけで晴也の小母さんを誘いに行ったから……」

彼は皆に嘘をついていたのだ。

誰も傷がつかないようにすべての憎しみを一人で受けていたのだ・

「……彼が何をしたの。」

そう私は呟いていた。

岩城君は信じられない顔をしていた。

「こんな残酷なことがあっていいのか……」

それは私も思っていた。

彼は何もしていないのに……

そして、あまり真実を知りすぎた私はショックのあまり意識を失った。

その中でみんなが私のことを呼んでいたのが私の意識は闇に吞まれていった。

……

・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

「これが真実だ。」

俺たちが調べてきた言った真実にみんな言葉が出なかった。

「たぶん、俺たちの知った真実は晴也にとって想定外だったと思う。」

『鈴蘭は悪くない』と言って一部の真実を話して

俺たちを納得させるつもりだったのだと思う。

それだけ知っていたら俺たちが納得すると思ったのだろう。

そのために水谷を呼んだ。

それだけでは晴也が霞さんを殺した真実は変わらない。

けど、予想外のところに真実を知っている人間がいた。

それだけは彼にも予想できなかった。

そのまま鈴蘭に晴也を怨ませるつもりでいた。」

全員の顔が真っ青だった。

それもそうだ。

晴也をみんな心の中で少なからず憎んでいた。

そうして晴也はその憎しみをすべて引き受けたのだ。

だれも悩まないように誰も傷つかないようにように、

そこで檜原が目を覚ました。

「檜原大丈夫か。」

どう見ても大丈夫ではない顔で

「大丈夫よ。」といった。

「お父さん、お母さん、あいつ・・・いいえ

晴也君がどこに行ったのか知りませんか。」

「残念ながら知らない。

だが、明日の朝10時に鈴蘭に霞の墓に一人だけで来てほしいと言  
つてた。」

「・・・わかったわ。」

「檜原・・・」

「大丈夫よ。岩城君これ以上の嘘はないと思います。

私は彼に恨まれても仕方がない。

だから私は彼と向き合う。

それよりもあなたにはお願い事があるのです。」

と俺に向かって言った

## 第八話（後書き）

アクセス数が1000HITを超えました。

いつも読んでくださる皆様

本当にありがとうございます。

一応、あと二三話で完結するように考えてますが、色々、番外編やifの世界などの企画も考えていたりします。そして最後に

この物語の結末までお付き合い願いたいと思います。

## 第九話

聞こえる足音

さあ、私の未来を閉じるために・・・

これが私の最後の墓参りになるかもしれない。

霞、父さん、母さんもうすぐそこに行けるかもしれない。

・・・許してくれますか。

・・・

・・・

・・・

・

「来ましたか、檜原さん。」

そこには私をまっすぐ見つめる檜原さんが

「あなたは真実を知りました。」

それでもまだ私が憎いでしょう。

私があなたの姉を殺したことには変わりありません。」

彼女は何故かこの発言を聞いて目を潤ませいる。

そして抱きついて

「・・・もういいから」

今何を・・・何を言った。

「あながお姉ちゃんを殺してないのは知っている。

あの事の実話を話してくれることがいた。

知っている人がいた・・・

あなたはお姉ちゃんを殺していない・・・」

言わないでくれ・・・その実話を・・・

「お姉ちゃんを殺したのは・・・」

それを言うてはならない・・・

「言うては駄目です」

「いいえ。」

言わないといけない。

お姉ちゃんを殺したのは

殺したのは私だった。

私は思い出した・・・

あの日のことを・・・

いつまでもあなたに甘えてられない。

そして今ここで話してあの日の本当のことを・・・

あなたの口から聞きたい・・・

本当の真実を・・・

・・・そうですか知ってしまったのですね。

「わかりました。

今からすべてを話しましょう。」

ごめんなさい。

母さん、霞、私が死んだあとに真実を手紙に託そうと思っていたのに

少し早くなってしまいました。

「あの日の真実を・・・」

・・・

・・・

・・・

・

あの日は父さんの一周忌でした。

母さんは立ち直ったと言えどやはり元気がなく

私も悲しかったですが母さんのその姿を見てもっと悲しくなりました。

そこで私はどうにか元気を出してもらったために

色々考えたのですが元気にできる自信がなく

そこで二人で遊んでいた霞さんと由季さんに話を聞きに行ったのです。

「ねえ、ゆきちゃん、かすみちゃん、

きょう、おかあさんのげんきがないんだ。

きょうはおとうさんがしんだひだからかな・・・

どしたらげんきになってくれるかな・・・」

「うん

なにかあるかな？」

ゆきちゃんはなにかおもいつく？」

「そうだね。

うん・・・

そとにあそびにいこうよ。

そうしたらげんきになってくれるかも。」

「けど、かすみちゃんのおじさんもおばさんも『ダメ』っていうかもよ。」

「いいじゃん、わたし、いってくる。」

「まって、かすみちゃんぼくもいくよ。」

そういつて私は霞さんのあとについて行きました。

私は母さんを見つけて

霞と外に誘いました。

その時、霞がキャッチボールをしようと言い出したのは知っている  
と思います。

その後、5人で外に出て

まず、ひのは・・・いえ、鈴蘭さんあなたと私がやり始めました。

次にあなたと水谷さん

水谷さんと霞

水谷さんと私

ここで水谷さんは家に帰りました。

私と霞

最後に霞とあなたです。

その後に事故は起きました。」

「・・・ねえ、どうしてこんな嘘をついたの。」

「・・・言わないといけませんか。」

「聞きたいのよ。」

「このことの真実が知りたいから・・・」

「・・・わかりました。」

実はあの事故の後、母さんと霞は少しだけ意識がありました。

まず私は霞に駆け寄ったのです・・・

『かすみちゃんしつかりして』

もう霞は殆ど意識がありませんでした。

そんななかで霞は呟くように

『・・・た・・・すけて・・・みんな・・・と・・・もっ・・・と  
い・・・しよに・・・いたいよ・・・しにたく・・・な・・・いよ・  
・・・はるや・・・くん・・・たす・・・』

そう言い残して霞は息を引き取りました。

私は霞が死んだのを見て見ぬふりをして

「かすみちゃんもつすぐきゅうきゅうしゃがくるからね。」

しんじやだめだよ。」

といいその場から逃げ出しました。

母さんを探して最後に約束したのです。

『誰も憎まないで』とそして

『周りの人を救えるような立派な人間になるように』

最後の部分はこの前にあなた達と遊んでいた夢を見た時に思い出したのです。

そしてそれから私は意識を失いました。

意識を失っている時、

夢の中で霞に会いました。

『すずらんをたすけて。』と一言だけ言い残して消えていきました。

そして私は小父さんたちにこんな嘘をつきました。」

「それは聞いたわ。」

「・・・そうですか。」

今思うとあれが始まりの嘘でした。

そして私は父親のとあるマンガを読みましてね。

そこに書いてあったのですよ。

『ずっと眠っているものを起こすにはどうすればいいのか』

『憎しみを与えてやればいい。そうすれば憎悪の中それを思い目が覚めるから』

みたいな感じで書いてあったと思います。

そして私は眠っているあなたの耳元でこう呟きました。

『かすみちゃんはしんだんだ。

ぼくがころしたんだよ。』

これだけです。

僕が殺したの部分は私がただ思いついたことです。

お医者さんが

『彼女は姉が死んだことを認めたくない。

それが辛いから目を覚まさない。』と言っていました。

しかし、真相を知る者は私一人です。

彼女が何を認めたくないのか、

彼女が姉を殺した。という真実を認めたくないと何となく私は気づ

いていたので・・・

これが真実です。」

私は真実を話しました。

「さて、すべてを話しました。

どうですか真実を知って。」

そういったあとには彼女は私に縋って謝っていました。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、  
・・・」

「・・・謝られても私の時間は戻ってきません。

それよりどうしてくれるんですか。

今日、私は貴女を追い詰め

貴女に骨髄液のドナー申請の紙を破いてもらって

そのまま病院で最後を過すつもりだったのに・・・」

「それってどうゆう・・・」

「どうもどうもないですよ。

私は今白血病にかかっているのですから・・・」



## エピソード

「お姉ちゃん今年は皆で来たよ。」

あれから一年がたった。

あれから彼は入院、移植、闘病生活を乗り越え

無事に今日退院することができた。

お姉ちゃんと小母さんの死んだこの日に・・・

移植をしてから

彼は生死の間を彷徨っていた。

運よく拒絶反応がそこまで強くない方だったらしいが

それでも高熱にうなされ

5日間ほど意識を取り戻さなかった。

それでも彼はリハビリを終えきょう退院できたのだ。

私は彼が入院している間

由季と岩城君と私が流した噂をすべて否定していた。

そして本当は私が姉を殺したことも噂で流した。

私を冷たい目で見る人間もいた。

嫌がらせにもあった。

それは仕方のないことだ。

しかし、由季や岩城君がいたのでどうにか乗り越えられてきたのだ。

彼はずっと一人で耐え忍んできたのだろう・・・

誰にも助けを求めることもできずに

この闇を抱え続けつて来たのだ。

彼の心の強さを優しさが身にしみてきた。

彼は「霞との約束を守りたかった。

そしてただ単純にあなたを守りたかった。

私が勝手にやっただけ。

だからあなたは自分を責めたりしなくていい」と言ってくれた。

しかし、そんなことを言っても私は自分を責める。

今まで守ってくれている人を憎み続けたのだ。

だから、私は彼に生涯をかけて罪滅ぼしをしていくつもりだ。

今まで守ってくれた彼に恩返しをするために、

「こんな不器用な生き方しか私はできないけど見守っていてね、お姉ちゃん。」

そう、彼を支えるような生き方しか今は考え付かない。

しかし、今の私にできるのはこれしかないから・・・

「お父さん、お母さん、晴也君、早く。」

それでも今は幸せだから・・・

主を讃えよ。

あの日うたった歌は今再び響き渡るから、

私が今、讃えてるのは神ではなく

彼であるが誰にもそれを否定することは許さない。

神にも見捨てられたような人生を歩んできたのだ。

私は彼に向けて歌おう

ハレルヤ

## エピローグ（後書き）

はい

はじめての連載を終えた雨野です。

最後まで読んで下さった皆様、

本当にありがとうございます。

一応、ハレルヤ完結です。

あれっ？と思う人もいるかもしれませんが。

実はこの間にまだ一話増やそうかな思ったのですが、

あとから考え付いた構想などを付け足していくと

文章がぐだぐだもっていることも分かっていたので

こちらへんで切らせてもらいました。

晴也にはづらい思いしかしてないように見えるので、

今度はハレルヤのキャラをベースにした

ラブコメでも書いてみたいと思っています。

今は次に何を書くのか構想している途中なので

ある程度、書き上げてからの更新になると思います。

なので、少しの間

休憩をさせてもらいたいと思います。

そして最後にもう一度

ここまで読んで下さった皆様

本当にありがとうございます。

ちなみに一応幻の十話目も書いてありますが

今のところ更新するつもりがありません。

ある程度の人が見たいという感想が来た場合のみ

書き足したいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0414f/>

---

ハレルヤ

2010年10月11日01時17分発行